上方「似顔画師」北洲の北斎学習について
―相貌から身体へ―

同志社大学 中野 志保
NAKANO Shiho

春好斎北洲（作画期 1802～32）は、化政期の上方役者絵に隆盛をもたらした「似顔画師」である。最初は、上方役者絵の創始者とされる流光斎如圭（作画期 1777～1809）・松好斎半兵衛（作画期 1795～1805）に師事し、「春好」「春好斎」と名乗っていた。しかし、文政元年(1818)以降、江戸の葛飾北斎（生没年 1760～1849）の弟子となって、名を「春好斎北洲」「北洲」に改め、北斎が読本挿絵の中で創始した躍動的な身体の描き方を役者絵に取り入れた。

本発表の課題は、北斎が読本の挿絵で用いた人体表現の様式を、北洲が、読本とは異なるメディアである役者絵に取り入れた目的や理由について考察することである。この課題を解決するために、役者絵の対象、判型、形式、様式を手がかりにして、北洲の制作時期を三期に分けるとともに、役者の動向や「役者評判記」に記録された演技についての記述を参照することによって、描写対象としての役者の演技の質の変化が、役者絵の変質を引き起こした可能性に言及する。

第Ⅰ期（享和 2 年～文化 9 年［1802～12］）において、北洲は細判に大首絵の形式を用いて、生涯上方を本拠地とし、容貌と口説に優れ心情の表現を得意とした――「男はよし」「口説は此上なし」「うれいはきく」と評された――役者、二代目嵐吉三郎を最も頻繁に描いた。これらの役者絵は、前代の松好斎・流光斎から継承した様式で、役者の相貌の個性を鋭くうがつ「似顔画」の性格を持っている。

第Ⅱ期（文化 10 年～文化 14 年［1812～17］）になると、北洲は判型を細判から大判へ、形式を大首絵から全身像へと一変させた。それと同時に、最も頻繁に描く役者は、文化 10 年度（1813）に江戸から帰坂し、所作事や立ちまわりなど、身体の動きで観客の目を惹き付ける立役の演技を得意とした――「立ふるまひ面白く」「よく廻る事はるいなし」と評された――三代目中村歌右衛門と初代市川鰕十郎に変わった。しかし身体表現は、あいかわらず、松好斎・流光斎から継承した静的な様式のままであった。

第Ⅲ期（文政元年～天保元年［1818～32］）において、判型、形式、対象は第Ⅱ期と変わらないが、北洲は文政元年、来坂したと思われる北斎に入門し、北斎風の様式を役者の身体表現に転用し始めた。すなわち、肥痩に富む描線や小刻みに震える描線を用い、尖った足先と、重心を感じさせる「写実的」なフォルムを肢体に与えることによって、ダイナミックな動きを感じさせたり、予感させたりする「役者絵」を描き始めたのである。

これらのことから、北洲が北斎の描き方を採用し始めたのは、おそらく北斎との出会いをきっかけとして、江戸で芝居経験を積み、身体の動きで観客を魅了することになった役者の魅力を、十分に伝達するためには、北斎の人体表現の仕方こそ、役者絵に転用すべきものであることに気付いたからであると思われる。